

特 260 3
400

屋島

昭和改訂版
肉六



始



屋島

(梗概) 都方の僧西國行脚を思ひ立ち、屋島の浦に到りて海人の鹽屋に
 一夜の宿を借りけるが、此浦は源平合戦の舊跡なりとて、主の老人、
 先づ義經のあつばれなり骨柄より、景清三保の谷の鍛引きの様、佐
 藤繼信が能登守教經の矢先に斃れしことなど審さに物語ぬ。僧は餘
 りに委しき軍物語なりとて主人の名を尋ねしに、曉頃には我が名を知
 り給ふらん、各乗とも名乗らずともよしとて暗に義經なる由を漏しぬ、
 斯くて僧は磯枕に臥しけるが、夢に義經の靈甲冑を帯して現れ、娑婆の
 妄執去りやらぬよしを述べ、昔の合戦を思ひ出で、當時取り落した
 る弓を拾ひしは弓を惜むに非ず、名を惜しみしなりなど語るうち、瞋
 患の一念起りて合戦の様を見せ、夜の明くると共に果敢なく夢も破れ
 ぬ。

シテ 老翁
ツレ 男

後シテ 源義經

ワキ 旅僧

ワキヅレ 從僧二人

所 讃岐國屋島

季 春

屋嶋

^{わき}是ハ都方より出せる僧よてい、家来あむ

をんぼの程よ、只今思ひ立ち西國行脚と

志^{わき}の^{あき}上^{あき}まを^{あき}展^{あき}う^{あき}ま^{あき}ら^{あき}波^{あき}の^{あき}沖^{あき}津^{あき}舟

ちく入^{あき}目^{あき}見^{あき}雲^{あき}と^{あき}懸^{あき}そ^{あき}ひ^{あき}て^{あき}そ^{あき}あ^{あき}こ^{あき}乃^{あき}空^{あき}と

仍^{あき}程^{あき}よ^{あき}あ^{あき}り^{あき}一^{あき}船^{あき}路^{あき}入^{あき}て^{あき}屋^{あき}嶋^{あき}の^{あき}浦

肉よては程よお宿にけうまうひゆませ
しん せゆちてゆい余りよん苦き地居の内
 にては程お宿にけうまうひゆ作
わ 穉ん苦きいくるううはそに教の者
 ぬくはうは浦始て一見の事よていひふ
 ぬと辛よて作ゆへ お僧に教の人よて

ひがひくめし教よまて作ゆ 何とお僧に
 都北人と作ゆり さいんが 実のまばら
 といやけいお宿をかーせん 本
 よる挿も甚乃を此 唯草花とおる
 めせ 志らんとお育の照もきん 日暮りも
 屋ぬまき七夜 続月夜よき物もな

き海人北管^ノを^ノよたて^ノる^ノ言^ノ物^ノの^ノ昔^ノ
北筵^ハ痛^ハり^ハ也^ハ未上^ハ相^ノ磨^ハ浦^ノの^ノ名^ノ北^ノぐ^ハ
群^ノ居^ル田^ノ路^ヲを^ノ以^テ境^ヲせ^シよ^ナら^ズ新^ノ井^ノよ
海^ノは^ハん^ノ旅^ノ人^ノの^ノ古^ノ也^ハと^モ都^トま^シひ^ハあ^リ
り^ハ我^ノも^モと^トて^テ也^ハて^テ海^ノよ^モむ^セせ^シ
り^ハく^ハい^ハら^ハし^ハ中^ノの^ノ似^ハ合^ハぬ^ハ中^ノ軍^ノよ

く^ハい^ハら^ハし^ハ浦^ノを^ノ源^ノ平^ノと^モ家^ノの^ノ合^ノ戦^ノ也^ハ
街^ト取^リ及^テて^ハ夜^ノも^モた^カし^ハ物^ノ語^ハし^ハ
け^ハ尉^トと^モ年^ノ久^シき^ハ者^ハあ^リが^ハあ^リく^ハい^ハん^ハ及^ハ
び^ハい^ハる^ハ也^ハを^ノ語^ハて^テ也^ハを^ノ中^ノの^ノり^ハん^ハり^ハて^テ也^ハは^ハ
元^ノ暦^ノ元^ノ年^ノ二^ノ月^ノ十^ノ八^ノ日^ノ北^ノ軍^ノあり^ハし^ハ平^ノ
海^ノの^ノ面^ノ一^ノ町^ノに^ハあ^リし^ハ母^ノを^ノい^ハら^ハし^ハ入^リ源^ノ氏^ノ也^ハ

けりぬ、亦お給ふ、大御軍の、涉御衣束、在、地
の、錦、比、志、意、よ、は、義、繼、緝、の、津、著、長、鏡、ふ
ん、を、韃、ろ、子、よ、は、つ、さ、あ、る、ま、院、の、は
使、源、氏、の、大、御、掾、非、違、使、五、位、尉、源、の
義、經、と、名、の、里、持、ひ、一、は、骨、柄、あ、つ、ま、れ
大、將、や、と、い、へ、一、今、の、極、よ、思、ひ、出、れ、て、ふ

そ、時、平、家、の、方、より、い、も、詞、ご、う、と、終、り、
兵、船、一、艘、漕、あ、り、て、は、亦、源、お、も、り、い、り、て、
陸、の、敵、を、待、懸、し、よ、源、氏、の、方、も、續、
く、兵、を、平、騎、斗、申、め、と、こ、尾、の、首、の、御、身、
と、名、を、あ、り、て、ま、の、先、に、け、い、と、い、へ、一、新、よ、
平、家、此、方、に、い、と、懸、し、ま、儀、京、法、と、名、の、ま、こ、

尾首を目くらす戦ひしよし 時三尾

音にたのまもあつてかたへむらじよんは

しに 急流追懸三尾首が ころし

甲乃鞆をうつんで 境へひけばんおの音

も 男をのたまんとあへむ ちよるる

を 別かみ 針舟の板よりしちまひして

左ちへくしと我がのまはるをを流し流

して義経流馬を行よ赤よせぬハ佐友

継信能やそ友の矢先よりつて馬より下ふ

どうとあままばあよの葉まも耐まされ

共よ表とお不しなるり毎ハ沖へ陸陣へ

相曳よ引場の初ハ時のあうして破の波

あへはるわき連も更り浦風のち松が
根枕そをし思ひをのる昔なか
福くをし語りく
枝よゆの破鏡こ照する志をし
於妄執の下瞋恚とて鬼神魂乃境
豊よゆり我とは昔をしめて候をし

街よの波の下浅くはり業因に
早曉もと花やんと思ふ祿えの下栂より
甲冑を著して人をし判官をく
浦またり我義經が出立なるら瞋
妻よひう海の下妄執よの下於西海の下浪よ
深ひ生死乃海よ沈湍せり思はる心

あぐれ^バ 日^ヨ 其^ノ時^ニ兼^テ房^ノ中^ニ極^ニは^シ惜^ムの^ハは^振
舞^ハや^る後^ヲも^しよ^しも^時が^中一^もも^はこ^よ
て^ハ我^レは^ハ入^リ籠^ノ子^ノ金^をの^びる^はは^らる^るの^は
清^ノ命^ヲも^ろく^もい^はる^はは^らる^る源^を流^し一^中け^ハ
幸^ハら^判友^を是^をも^たか^らず^一ぬ^ハ一^はら^らる^るを^ハ
惜^むよ^あは^らる^る義^經源^平よ^らら^るる^を
曲^トヤラ

あ^らと^いぬ^あ一^は物^をた^た佳^名の^はら^らる^る
な^らは^らる^るは^らら^るる^はら^らる^る義^經
と^もあ^らる^るの^はら^らる^る一^はら^らる^るの^はら^らる^る
一^はら^らる^る一^はら^らる^るに^ハ力^ナ一^は義^經
一^はら^らる^るの^はら^らる^る一^はら^らる^る一^はら^らる^る
わ^らら^らる^る一^はら^らる^る一^はら^らる^る一^はら^らる^る

末代よあゝいぢやと流り流るゝ兼房ヤラハ叔
そ亦此ヤラハ人ヤラハといふも皆哉海を流ヤラハり
して上ヤラハ 智者ヤラハの感ヤラハひ 勇者ヤラハの怒ヤラハままの辱ヤラハ
けんの様ヤラハり教ヤラハまのまヤラハつとと惜ヤラハむハ
名ヤラハ此ヤラハ為ヤラハ惜ヤラハまぬわヤラハ一命ヤラハなれヤラハ身をヤラハ捨ヤラハて
し我ヤラハをヤラハ後ヤラハ規ヤラハみもヤラハ佳ヤラハ名ヤラハをヤラハ道ヤラハむヤラハくヤラハむヤラハらヤラハむヤラハれ

初ヤラハ成ヤラハべヤラハなれヤラハ又ヤラハ修ヤラハ羅ヤラハ乃ヤラハのヤラハ圖ヤラハ此ヤラハ夢ヤラハ 矢ヤラハは
けヤラハびヤラハのヤラハ善ヤラハもヤラハ度ヤラハ動ヤラハせヤラハりヤラハ ちヤラハあヤラハのヤラハ修ヤラハ羅ヤラハ乃ヤラハ
教ヤラハいたヤラハそヤラハ何ヤラハ能ヤラハをヤラハもヤラハぎヤラハぬヤラハ種ヤラハとヤラハやヤラハ 其ヤラハのヤラハ揚ヤラハ
一ヤラハ手ヤラハ並ヤラハのヤラハ志ヤラハりヤラハぬヤラハ 思ヤラハひヤラハそヤラハ出ヤラハるヤラハ 壇ヤラハ乃ヤラハ浦ヤラハ
のヤラハ其ヤラハ船ヤラハ軍ヤラハ今ヤラハのヤラハまヤラハぐヤラハ 岡ヤラハ深ヤラハよヤラハぬヤラハる
生ヤラハ死ヤラハのヤラハ海ヤラハ山ヤラハ一ヤラハ目ヤラハよヤラハもヤラハ度ヤラハ動ヤラハしてヤラハ 母ヤラハのヤラハりヤラハハ

時乃^ト去^リて^シ陸^ノよ^リの^海の^楢 月^ノよ^ク去^リ
 む^ハ甘^ク美^シ此^ノ光^ニ 潮^ノよ^クつ^クる^ル 甲^ノ乃^ク
 星^ノの^影 氷^ノや^そら^しく^抑く^も又^云々^ト
 の^波中^ニ赤^クあ^ひは^しち^づる^ル 母^ノ軍^ニ此^ノ懸^ク
 引^キま^し沈^むと^せし^程よ^クま^き乃^ク此^ノ波^ノ
 よ^リの^船と^て敵^トと^りし^群居^る 鷗^ノ園^ノの

去^リと^て入^ルし^浦風^成たり^言松^ノの^浦ら
 せ^たま^まと^つつ^前松^ノの^船崗^とそ^るり^お
 去^リて^て

去^リて^て
 去^リて^て

著者權所有

昭和九年二月二十日納本
昭和九年二月二十五日發行

定價金五拾錢

東京市下谷區上根岸町八十二番地

著者 寶生新

東京市京橋區銀座西六丁目二番地

發行兼印刷者

江島伊兵衛

發行所 下掛寶生流謄本刊行會

終